

世界仏教文化研究センター

リレーエッセー

コロナ社会で共に生きるために

No. 6

それでも、前を向いて



世界仏教文化研究センター 応用研究部門

日高 悠登（博士研究員）



コロナ禍の下で生活をしていると、かつて読んだ村上龍の小説『ヒュウガ・ウイルス：五分後の世界Ⅱ』（幻冬舎文庫1998）を思い起こさせられます。本作には、謎の奇病に挑む主人公たちが、幾度もの危機的状況乗り越えていく姿が描かれています。

本作に限らず、数多くの作品がいかにして危機的状況乗り越えていくかを描いてきましたが、現実の私たちに対して遠からず投げかけをしていたと思われます。この数ヶ月の間で、創作世界に近い事態がコロナ禍という現実として立ち上がり、社会的混乱は底知れぬものとなりました。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)と闘病している方々のみならず、未感染の方々も、日常生活に潜む感染への危険に怯えなければならない状況が依然として続いています。

テレワーク、オンライン講義による感染拡大防止への工夫はされてきましたが、勉学と娯楽に励む皆様であれば、数ヶ月以上にわたって精神的にも身体的に

も耐えなければならない状況が続き、その満ち溢れた若さを発散する場に事欠いているものと思われます。ですが、忍耐には限界があり、ぶつけようのない怒り、そして閉塞感を常に感じていることでしょう。



実は、私も生活の中でコロナ禍の影響を受けたと実感する出来事がありました。私の祖父母は東北在住で、祖母は数年前に亡くなりました。この時は残存放射能の影響を懸念して、両親のみが祖母に会いに行きました。そして、今年7月には祖父が亡くなりました。ちょうど、新型コロナウイルスの感染者数が増加した時期であったことから、私の家族は誰も葬儀に出席できませんでした。いずれの災害の影響によって、祖父母の元に駆けつけられなかったのは残念でありませんでしたが、二人ともあまり苦しまずに息を引き取れたという報せが孫としての何よりの救いでした。

ここで思い出されたのが仏陀の言葉です。彼は「八苦」という、人間の苦しみの一つに「愛別離苦」（愛する者と別れなければならない苦しみ）があることを説きました。今回のコロナ禍における祖父の死別により、その苦をあらためて実感することになりました。時間は決して巻き戻すことはありませんが、進んでいく時間の中で生きていく私は、時に生前の祖父母との思い出を振り返りながら、これからの時間のどこかで二人にまた会えることを日々楽しみに過ごそうと考えています。そして、コロナ禍終息の折には、必ず祖父母の位牌と墓前に手を合わせたいと望みながら、今を耐え忍んでいるところです。

実際、新型コロナウイルス感染症により大切な方を亡くした方々の悲しみは図り知れないものです。また、私と同じ状況にあって肉親や親族との別れに立ち会えなかった方々も、たくさんいらっしゃるのではないかとすることに心が痛みます。存在を失った悲しみの深さも、悲しみと向き合う距離も、心を癒せる時間も人それぞれでしょう。ですから、これまで享受してきた平穏の日々に、いつかたどり着けるよう願う次第です。一方で、これ以上悲しむ方々と犠牲者を増やさないようにする為にも、自分たちでできる範囲での感染拡大防止に努めていく他ありません。



ところで、コロナ禍の影響を受けたと実感することは、もう一つあります。それは思考の新規開拓です。普段通りの生活の中で、無意識の内に思考を深めていることはよくあるのですが、今回のような思いがけない状況により開拓されることもあるようです。自粛生活で人と会うことが減少したことにより自己を見つめ直し、思考する時間が十分確保できたことが、ある意味、不幸中の幸いだっただと言えます。仕事では何かと思考しなければならないわけですが、在宅勤務によりさらに時間が確保されて成果が現れてきました。

そもそも学生時代では、自室にひきこもる研究生活を送らざるをえなかったもので、当時を追体験しているような気分でもあります。それだけでなく家事全般、情報環境整備、健康維持などに対して視野をより広げるきっかけにもなったので、こちらの方も新規開拓でした。気づけなかったことに、気づけるということ。まさしく、置かれた状況を冷静に見極めていくことの大切さをあらためて実感しています。視点を変えて物事を見る機会が得られたという意味では、逆境こそ思考を蓄えられる機会でもあるようです。



最後に、このエッセイを読んでいる皆様が安心して日々を送れるよう遠からず見守ると共に、一刻も早いコロナ禍の終息を願っています。

【著者紹介】

専門：宗教学 死生学 臨床哲学